



日口交流

発行：特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



ロシア語試験対策クラス

8月の夏休み後半、ロシア語検定試験（ТРКИ：テルカイ）を受験してきました。会員の皆さまはご存知の方が多いと思いますが、この試験はロシア連邦教育学者が認定する外国語としてロシア語を学ぶ人のための国家能力試験です。受験科目は、①語彙・文法②読解③作文④聴解⑤会話の5科目からなります。

詳しいことはお調べ頂くとして、この試験および私が受験したレベル2の試験について特徴および雰囲気をお伝えします。

1. 試験はすべてロシア語で行われる。問題が日本語で書かれていることはありません。すべてロシア語で書かれています。つまり問題文も理解する必要があります。日本でよくある露文和訳、和文露訳のような問題はありません。

2. 作文問題のオフィシャルレター記述が慣れていないと戸惑う。出張申請や報告、遅刻したお詫びなどロシアにおける公の場面での作文を書く必要があります。書式や言い回しなど慣れが必要です。

3. 聴解では旧ソ連映画が問題として出てくることが多い。旧ソ連映画好きとしては趣味と実益を兼ねてありがたいのですが、今回の試験では私が観たことがある映画ではなく残念でした。ほか、試験内容は多岐に渡ります。

試験対策としては、過去問題や練習問題テキストがナウカ書店などで販売されているため購入して取り組むことが一番ですが、急げ者のわたしはひとりで続けることは無理そうなので、協会で開催している検定対策講座に参加しました。ナターリア・コルド先生の指導の下、3名のメンバーで2年間励ましあいながらなんとか続けることができました。10月中旬現在、試験の結果はまだわかりません。もし、少しでも興味を持った方がいらっしゃったらぜひ試験概要を調べてみてください。ロシアから届く合格書はうれしいですよ。

（ロシア語受講者・五十嵐美恵）

お知らせ

●第46回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2017年11月12日（日）9:00～12:00

講師：菅野エレーナ

場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階造形表現室
会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局までお願いします。Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

●マトリョーシカ・友禅・折り紙展示会

日時：11月20日（月）～22日（水）10:00～18:00

場所：神保町「書泉グランデ」7階

日頃の生徒さん方の成果発表と先生方の作品展です。

エレーナ先生のマトリョーシカ製作と笠原先生の友禅実演、先生方の指導による体験もできます（時間、費用はHPをご参照下さい）。折り紙は展示のみです。

一部、販売もしています。ロシア直送チョコレートも出ます。

ТРКИ第2レベル対策クラスは2015年11月に開講した。私にとって会話が難関である。第2レベルの会話では社会問題（環境問題、労働問題など）についてのディスカッションを行うという問題がある。「自分の意見を根拠だてて説明し、例や比較を挙げ、今後の予測を述べて、結論づける。」というものであり、日本語でも上手くできるかわからない。問題の一部にソ連時代の映画が出ると聞き、これをきっかけに1970年代の映画を見てみた。Яндексで検索すると、映画はフルバージョンが見放題、台詞をテキストに書き起こしたものもすぐ見つかった。「Осеньний марафон」で、どうしてもわからないところがあった。主人公の男性が、ガールフレンド宅でジャケットをプレゼントされる。「よく似合うわ」「ありがとうございます」という言葉が俄さんのいる家にジャケットを持って帰るわけにはいかない、と言ったのだ。実際の試験では約1分半の映画のほんの1シーンが出た。女性宅の玄関先で男性と言い合っているが女性はつれなくドアを閉める…「2人にどんなトラブルがあったと思いますか？」と試験官が問うが、分からなかった。ただ、ТРКИには子ども用があるのはなぜかが分かった。日頃、私たちは言葉で何かを伝えるだけでなく人を喜ばせたり怒らせたり、気持ちを動かしている。ТРКИはそんな「言葉力」が試されるテストである。（常任理事・岩本智子）

*検定対策をご希望の方は、事務局までご相談ください。

●第46回懇話会のお知らせ

コンスタンチン・サルキソフ氏講演会

『将来につながる日ソ・日ロ関係史の再考』（日本語講演）

日ロ関係のロシアにおける最高権威がこれからの日ロ関係を探る。現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所特別顧問、日本研究センター所長。山梨学院大学名誉教授。

日時：11月18日（土）2:00～4:00（開場1:30）

会場：日本記者クラブCホール 日本プレスセンタービル10F

千代田区内幸町2-2-1

交通：東京メトロ霞ヶ関駅C4出口3分 B2出口7分 都営三

田線内幸町駅A7出口3分

会費：会員2,500円 一般3,000円 ロシア人2,000円

会員学生1,500円 学生1,800円

申込：会員／一般／学生等の別・氏名・電話・FAX・E-mail等明記の上、FAX、E-mail・郵便のいずれかの方法で協会事務局までお申し込みください。満員になり次第締め切ります。

懇話会staf募集集中：080-4325-9981 / simatac@kzh.biglobe.ne.jp 川島まで



日口交流バーベキュー会に参加して

木村 冬馬

去る九月三十日、日口交流協会主催のバーベキュー会に参加した。協会の活動に参加するのは五月の皇居散策以来で、今回の企画も大いに楽しみにしていた。

お誘いを頂いたのは八月末。折しも、所属する山岳部で山行計画を立てている最中で、一旦は涙を飲んでお断りした。しかしその後、山行の日程がずれ、この会に参加する運びとなった。集合場所の高尾駅は、山梨へ登山に行く際に通過する場所だったので、少し不思議な気分だった。

当日、駅に着いた私は、参加者を誘導する役を仰せつかった。案内板を持って立っている間、協会の方々が話し相手になってくださり、緊張を解くことができた。そうこうしているうちに、参加者が一人、また一人と現れ、駅前は賑やかになり始めた。日本人に交じったロシア人が目立つのは当然として、対露交流の活動をしている日本人も見分けやすいのはなぜなのか、似たような興味を持つ仲間として、似たようなオーラが出ているからだろうか、などと考えているうちに、バーベキュー場に向かう時間になった。

蓋を開けてみると、知り合いの大学生が多数参加しており、何人かとは久しぶりの再会となった。また、学生に限らず、さまざまな人と話す機会を持ちたい、と考えていたところ



ろ、益田常任理事の懇切な紹介のもと、新たな知己や知見をたくさん得ることができた。また、肉や野菜はどれも美味しい、バーベキュー自体も大変満足の行くものになった。

終了後には、ロシア人を交えた数人で周辺を散策し、ロシア語を教わったり、年越しパーティーの約束をしたりなど、余韻まで大いに楽しんだ一日だった。

大学で、ロシアに興味のある友人があまりいない私にとって、独学固陋に陥らないためには、このような交流の場は非常に大切だと改めて感じた。今後も、機会があればぜひ参加していきたい。

（東京大学医学部3年・日口学生交流会幹事長）

者も、日本語を勉強することでどのような可能性があるのか、熱心にガニシェル校長の説明に聞き入っていました」が、表しています。

この背景には、日本で急速に進む少子高齢化による介護現場の人手不足問題があります。厚生労働省のデータによりますと、100歳以上の人口は1998年に1万人を突破、2017年には約6万7千人と、急速に増加しています。また2014年時点では、65歳以上の約18%が要介護の状況とあります。日本政府は、介護分野の外国人就労者の受け入れ拡大をねらい、入管法を改正、在留資格「介護ビザ」を創設、2017年9月から本格運用を始めています。技能実習制度には「介護」が加えられました。

ガニシェル校長がこれまで培った多彩な人脈のおかげで、この情報が、いち早くウズベキスタンの若者達にも届けられていました。いかに魅力的なビザかは、隣接州から参加した青年がいたことからも容易に察しができます。「おしん」が大好きなお国柄であり、古くは日本人抑留者と地元の人々から始まった友好交流は、二国間レベルになって現在まで続いている。

近々、日本人と協力して介護現場で働く多くの外国人を目指すことになりそうです。その中から、リシタンの街角に響いていた「コンニチハ」の元気な声が聞こえたら嬉しいですね。

（リシタン・ジャパンセンター事務局長）

有馬朗人会長が名誉都民の称号授与

当協会の有馬朗人会長が10月2日に、2017年度の名誉都民として、顕彰されました。

一同、心よりお祝い申し上げます。





《モスクワ・アラカルト46》

K氏と眺めた黒い富士

日向寺 康雄

私事になるが、齢90を超える父の介護のため、モスクワでの仕事に区切りをつけ帰国して早4カ月が過ぎた。これほど長い故郷滞在は約30年ぶりだ。日本生活のリズムやテンポをはずし、社会における暗黙の了解の数々についてゆけない自分に、我ながらつい苦笑してしまう毎日が続いている。人間の本能が呼び覚まさるロシア生活の混沌としたエネルギーが、時にたまらなく恋しくなる。

そんな折、はるばるウラルから旅行中のK氏が、父の見舞いに寄ってくれた。氏は、アマチュアの日本研究家で70をとうに過ぎている。まだ樺太と呼ばれていた頃のサハリンに生まれた。当時近所には多くの日本人が住んでおり、彼らを通じて日本の文化や風習に興味を持つようになったという。日本語の発音は、北海道から聞こえてくるラジオで学び、かなや漢字は仕事の合間に独習した。氏は長く輸送機のパイロットとして働き、クリルやカムチャッカに物資を運んだ。そして年金生活に入ったのを機に、奥さんの出身地であるウラルの炭鉱町に移り住んだ。そこで彼は、子供達を相手にスキーの指導をしたり日本文化サークルを立ち上げたりした。

3年ほど前、モスクワの我が家に半年間居候していたNは、実はこのサークルの熱心なメンバーで、その縁で私はK氏と知り合ったのだ。Nの話によれば、K氏は昨年妻を亡くし、自身も今年ガン宣告を受けたことから「人生最後の旅」として日本行きを望んだのだという。K氏は「一番弟子」のNを伴い、9月中旬から3週間余り、沖縄・姫路・奈良・京都・日光そして東京を旅した。氏は、すでにソ連時代に2度、日本を訪れたことがあったが、当時はまだソ連人の沖縄訪問が厳し



向かって右端・筆者

く制限されていた。そのため氏は今回特別に、沖縄に1週間近く滞在した。「あの戦争が残した傷跡と島の現状を自分の眼で見て、自分なりに歴史をもう一度考え直したかった」からだ。そして帰国の3日前、我が家に寄ってくれた。鬼怒川温泉で「人生の疲れを癒し、魂の洗濯をした後」だ。

父はK氏と初対面だったが、すぐに打ち解け、認知症があるとは思えない程しっかりととした口調で、夫婦で行ったロシア旅行の事などを話し、

先に逝った妻の思い出を互いに語り合った。こうした時のロシア人の素朴な温かさ、気取りのないやさしさ（父の尿意に気付きトイレまで手をひいて連れて行くなど）には、心に染み入るものがある。私は御礼に、K氏を箱根への半日観光に招待した。あいにく曇りがちの天気だったが、私達は運よく大涌谷で、富士の雄姿を垣間見ることができた。

K氏は、しみじみとした調子で「硫黄の匂いにクリルの火山を思い出し、とてもなつかしい。今日まで天気の都合で、富士を見ることができず残念だったが、これで思い残すことなくロシアに帰れる」と私に言った。

富士は、山頂にまだ真っ白な雪ではなく、私達を支えてくれる何か頼もしい影のように、噴煙の向こうに力強く黒々とそびえ立っていた。

旧満州で生き別れの親子、47年の歳月を経て封面、その後

沖大夫

前稿に紹介したマリーナ・ボリソワ（満里子）さんの来日から25年、四半世紀が過ぎた。戦後から数えても、すでに70年を回り、第3四半世紀（という言い方をするかどうか知らぬが）に手が届きそうになっていることを考えれば不思議なことではないのかもしれない。

当時、石橋正美さんの息子に当たるニキータ（正輝）さんもマリーナさんと大牟田を訪れる予定であったが、諸事情により叶わなかった。正輝さんの娘、オリガ・ボリソワさんは家族の思い出を大切に温め、祖父・正美さんと祖母・リディアさん、そして叔母マリーナさんの足跡を追ったドキュメンタリー映画「Чужие города」の作成に尽力した。背景事実の確認のため、ハバロフスクやその他、文書館へ通い、資料とにらめっこする日を過ごしたとオリガさんは話してくれた。その映画がロシアで昨年、いくつかの映画祭で公開され、好評を博し、いくつか賞を受賞している。

今年9月末から二週間ほど、映画の宣伝を兼ね、オリガさんが初めて日本を訪れた。その模様をレポートしていきたいが、その前に映画で取り扱われている時代背景について紹介しておきたい。

祖母リディアさん一家はもともとエカチェリンブルクに居を構えていたが、1917年の革命の銅鑼によってその生活が打ち碎かれ、流浪を余儀なくされたということである。第一次大戦に続く、革命の火の手は次第にシベリアへも波及していったのであった。一家は、東の涯、ハルビンへ赴くことに

なる。折しも、その地で東清鉄道（1932年に満鉄に経営が移譲）に職を得ていたリディアさんのお父さんのもとへ。当時、ハルビンは戦火を逃れてくる人の中継地点の役割を果たし、そこから日本へ渡り、新天地アメリカへ向かうルートを取る人々が少なからずあった。革命直後の日本は、こうした避難民が押し寄せる一方で、帝政の弾圧の手を逃れてアメリカやカナダ、豪州へ退避していた人々が革命に馳せ参じようとして続々と日本へ入港してきた。その意味で、ドイツやフィンランドを経由し、イギリスへ渡り、そこからアメリカを目指す西回りとは逆のルートとして機能していたと見ることもできるであろう。地政学的に、日本はイギリスと同じ役割を担っていたことになる。いずれにしても多くは旅費に窮する者ばかりで悲劇も数知れずあった。

閑話休題。革命の内戦の最中の1920年、リディアさんはエカチェリンブルクで誕生している。彼女は長じて、東洋学院（現・極東連邦大学）で英語を習得し、また、音楽学校にも通い、ピアニストとして将来を嘱望される存在となっていく。1935年、一家に下宿人としてやって来た無線技師・正美さんとの運命的な出会いがあり、幸福な時間を過ごした。が、終戦の声を聞き、ソ連軍が押し寄せるとなつた間の平和が破られ、正美さんは家族を連れて鉄道でソ連領へ逃れることを決意するが、捕われの身となってしまい、頼りにしていた正美さんの親友も途中で列車が匪賊の襲撃に遭った際に命を落としてしまったのであった。（続く）

政治と科学の距離

津田 夢子

2017年9月26日、ロシア科学アカデミー（Russian Academy of Sciences: RAS）の総裁選挙が実施され、アレクサンドル・セルゲーエフ応用物理学研究所所長が新総裁候補に選ばれ、翌9月27日に大統領の承認を受け正式に総裁に就任しました。この総裁職は1724年から続く歴史的にも名誉ある立場で、いわばロシア科学の頂点に立つ人間であることを意味します。今日は、先日の総裁選をキッカケとして、ロシアにおける政治と科学の距離について考えてみたいと思います。

科学研究は自由にやるに越したことはありません。RASは長い間、独立非営利機関として国家から委譲された資産の所有・運営、傘下の研究所の設置・廃止を独自に実施できるなど、政府からかなりの独立性を有していました。政府から予算の多くが拠出されていましたが、その使途については完全に自主独立の立場で決めてきたというわけです。しかし、内部のみで活動評価を行うという閉鎖性や、経済社会の変化に対応できていない等、その非効率性に対して批判が相次いだことを背景に、RASに対する政府の管理が強化されてきました。以前このコラムでもRAS改革の概要についてお話ししたことがあったと思います。

政府との関係で見てみると、以前はRAS内で選出された総裁候補はそのまま総裁として任命され就任することができましたが、今では正式に総裁として任命されるためには大統領の承認が必要です。仮に大統領が否認した場合は、RASは再選挙を半年以内に行わなければなりません。先月のRAS総裁選挙では、選出されたセルゲーエフ氏は滞りなく無事に総裁として就任することができました。普段であればこうした大統領の承認はなんでもないことのように思いますが、前回2013年の総裁選挙ではパワーゲームの材料として使われました。前回の総裁選挙で新総裁候補として選ばれたフォルトフ氏は、ちょうどRAS改革の法案が国会に提出され審議が行われようとするタイミング

両都つかい

大原 翔

土曜の朝、ネフスキービ通りに面したこぎれいなカフェで時々過ごす。仕事で多忙だったその週の自分へ癒しであり、ちょっとした贅沢な至福の時間である。大きなガラス窓のそばの席を確保し、通りを行き交う人々や車を眺めながらしゃれたパンとサラダを口にし、そして本当は紅茶のほうが好きなのに、無理して、アメリカーノをちびり、ちびり飲む。ここは本当に、サンクト・ペテルブルクなのかとふと思う。どこか欧洲の街ではないのかと。

このカフェには、多くの飲食店と同様にWIFIがつながっていて無料、ITに習熟しているかの如き顔つきをして、その実、苦勞しながらスマホをのぞく。サンクト・ペテルブルクとモスクワに初めて旅行に先日来た年來の友人からのメールがあった。

曰く「怖い国だと思っていたのが払拭された。実際来てみて文化、芸術のすばらしさに感動、街が清潔で綺麗なのに驚いた。夜間相当遅くまで女性の一人歩きが見受けられるなど、治安も思ったよりいいように感じた。改めて、欧米の一画をなす先進国だと感じ



で、プーチン大統領から正式に任命されるための承認を得なくてはならなかったのです。そのため、RAS改革を欲する側の意向を全面的に受け入れることを取引に承認を得たかたちとなりました。

今回のRAS総裁選挙では最終的な大統領の承認はスムーズにいきましたが、選挙までには色々と問題もありました。まず、選挙の日時が半年間も延期されたのです。本来であれば、2017年3月に行われるはずが、2期目を目指すフォルトフ総裁（当時）を含むすべての候補者が直前になって規約の不透明性などを理由に立候補を取り下げ、半年間の延期が決定されました。9月の総裁選挙までの間に、選挙関連の規約が改訂され、立候補の要件の一つに、RASの推薦リストに基づき候補者を政府が承認することが加えられました。つまり、政府が承認した選ばれた候補者が選挙に参加し、総裁候補として選出された後は大統領の承認を受ける必要があるのです。新しい総裁を選ぶためのイベントがどんどんと窮屈になっていく感じですね。

筆者はこうした事実一つを取り上げて、ロシアの科学自体が政府のいいように操られているとか、政治介入により自由な研究の場まで奪われようとしているといった極論を展開したいわけではありません。ただ、ソ連崩壊後新生ロシアになって、RASも他の機関と同様、新しい自由な雰囲気の中で研究体制を築き上げてきましたが、あまりに自分たちだけで決めすぎてしまつたからでしょうか、少しずつ上層部の構造に政治の介入が入り、政治と科学の距離は少しずつ縮まってきたように感じます。大事なのは、ロシアの科学が今後競争力を維持しつつ独自の存在感を存分に發揮していくかどうかということではないでしょうか。そのためにどういった改革を行いどのような方向に進むのか、また、とられた措置は適切であったかという点を真摯に検討する必要があると思います。

(JST研究開発戦略センター・フェロー)

た次第。」と、ここまででは、良い。初めてロシアに来られた方から、百聞は一見に如かずとお褒めにいたくいつもの言葉で、うれしい次第。続いて「風景的にもモスクワ川対岸から見たクレムリン、赤の広場辺りの景色に感心。」その通り。その次は、あれー、ネバ川はないの エルミタージュ美術館は？ サンクト・ペテルブルクでは、仕事の合間を縫って私が、一生懸命案内したのに・・。彼はそのことを忘れてしまったのか。

そういう私も最近、久しぶりにモスクワに行って驚いた。都心の道路の素晴らしいことといったら信じられない。ボリショイ劇場前やトヴェリ通りなど、舗装の素晴らしいこと、縁石の角がシャープなこと、色調もどこか西欧のにおいがする。道路に無断駐車は全くなく、歩道が広くて快適なこと・・。ロシアに若干偏見をもっていたであろう、日本から初めて来た友人は、それらを目にして、感嘆せざるを得なかつたのだろう。

モスクワとサンクト・ペテルブルクという2つの都、昔から、何かにつけ比較される。どちらが良いかと。サンクト・ペテルブルクの生活にも慣れてきて、サンクト・ペテルブルク派になっていると最近、自認していたのであったが、先日のモスクワ旅行では、それを覆すような景色が目に入ってきた。

ロシアのこの2つの都、案外知られてないが、人口では、欧洲ではロンドンに次ぐ、2位と3位の大都市である。私は、両刀、ならぬ両都つかいでゆこうと思う。（2017年10月記）